

天然ニホンウナギ資源管理研究

(予算区分 受託 研究期間 平成 27～30 年度)
担当：水産技術研究所浜名湖分場 飯田益生

【研究の背景とねらい】

- ・ニホンウナギ（以下、ウナギ）は、平成 26 年 6 月に国際自然保護連合が絶滅危惧種に指定するなど資源の減少が危惧されていますが、天然ウナギについては生態など基礎的な情報が少ないのが現状です。
- ・河川に遡上せず一生を海水域で過ごす「海ウナギ」は、ウナギの再生産に大きく寄与している可能性が指摘されており、その生息状況や生態は解明すべき課題です。
- ・当场では、水産庁の「河川及び海域での鰻来遊・生息調査事業」に参画し、最下流部に浜名湖という海水域を有する都田川水系をフィールドとして、海水域に生息するウナギを主体に生態や漁獲実態など基礎的な知見の蓄積を進めています。

【これまでに得られた成果】

(平成 27 年度の成果)

- ・浜名湖では、ウナギは主に小型定置網とうなぎ壺（筒）で漁獲されており、これらの漁具で漁獲されるウナギの全長範囲はほとんど変わらないものの、秋季に産卵に向かう親ウナギ（銀ウナギ）は専ら小型定置網で漁獲され、漁具によって漁獲特性が異なることが示されました。

(平成 28 年度の成果)

- ・水域別に成長期のウナギ（黄ウナギ）の全長組成と性比を調査したところ、河川下流域などの汽水域はウナギの初期成育の場と同時に雄の生息場所であるのに対し、海水域（浜名湖）は河川である淡水域とともに雌の生息場所であり、水域によって生息場所としての役割が異なることが明らかになりました。
- ・漁業者への聞き取り調査の結果、浜名湖におけるウナギの漁場は、主に底質が砂泥の水域あるいはアマモやヨシのある水域に形成されており、ウナギの生息には潜砂が容易な底質や植生など身を隠すことができる場所の存在が重要であると考えられました。



図 アマモ場での漁獲調査（上）
と漁獲された黄ウナギ（下）

【期待される効果】

- ・都田川水系における天然ウナギの生態や漁獲実態が明らかとなり、天然ウナギ資源の管理方策立案に活用されます。

【今後の計画】

- ・より小型のウナギについても調査を進め、来遊から銀ウナギとして産卵場に向かうまでのウナギの分布や生態について明らかにします。
- ・底質や植生とウナギの分布の関係を調べ、海水域でのウナギの生息環境保全に繋がる知見の集積を図ります。

(作成 平成 29 年 4 月)